

## 2018年第88回国医節

### 第10回台北国際中医薬学術フォーラム

民国時代に余雲岫が提案した「中医廃止」法案に対して中国全土の中医界より反対運動が起こり、同法案が完全廃案になった日を記念する行事である第88回国医節と共に第10回台北国際中医薬学術フォーラムが3月17日・18日に台北市内の台大医院国際会議センターにて開催された。大会テーマは「中西医学融合の臨床・実証・理論研究/継承、イノベーション、グローバル化」で、台北市中医師公会を中心にブラジル、カナダ、アメリカ、フランス、ドイツ、ニュージーランド、シンガポール、中国大陸、香港、韓国など世界各国から多くの代表が集まった。

日本からは日本中医学会の代表団、藤門会、帝京鈴鹿大学、個人参加を含め約20名が参加し、17日の晩餐会では400名ほどが集まる大ホールで盛大に行われ交流を深めた。

翌18日の学術フォーラムでは清水雅行先生が「肝癌の中西医結合治療」について発表された。日本で保健適応されている生薬を紹介し、10年に及ぶ漢方治療により癌が消失した症例や抗癌治療と漢方薬の併用により登山が出来るまで症状が回復された症例などの確かな弁証論治や処方の絶妙な匙加減、そして清水先生と患者さんの信頼の深さを感じる事のできる素晴らしい発表をされ、会場を大いに盛り上げた。

10回目となる今大会は回を重ねるごとに世界各国からの参加者も増え盛り上がりを見せている。日本中医学会も継続し、発展しながらトラディショナルである中医学を盛り上げていきたい。



今回の訪台では、国医節、フォーラム参加とは別に、学会理事である西野先生の手配により、台湾の漢方薬のエキス材を製造・販売している順天堂製薬の工場を見学させていただきました。



(レポート：岸 奈治郎先生)

## 順天堂製薬のエキス剤

順天堂は日本で言えばツムラのような会社で、台湾の漢方エキス剤で No. 1 の会社です。

皆さんも黄色いプラスチックの角ボトルをご覧になったことがあるかもしれません。とても特徴的な容器で、一昨年見学した台中の中国中医薬大学の薬剤室にも沢山並んでいましたし、昨年見学した呉先生のクリニックでも沢山採用されていました。また、日本には無い方剤のエキス剤があるので、玉屏風散や銀翹散などが煎じなくても良いのはとても便利です。



私自身も自分の腎虚の為に、日本には無い右帰丸を飲んでいますが、友人の鍼灸師もプライベートで使っていたりして効果を経験しています。今回は、そんな薬がどのように作られているのか見学できるとのことで、大変楽しみにしていました。

## 順天堂製薬会社

順天堂製薬会社は、台湾国内はもとより、アメリカやシンガポール、マレーシアなどにも工場があります。台湾国内に数カ所ある工場のうちでも、最も大きいのが今回訪問した台中の工場です。

台中の新幹線の駅からタクシーで15分くらい走った所が工業地帯になっていて、その一角に立派な建物がそびえていました。



タクシーを降りると、早速漢方薬を煮詰めている香りが立ち込めており、まさに漢方工場といった感じでした。

大きなホールに集合、100人は悠に収容出来るくらいの段差のついた椅子が並んで、舞台の上にはスクリーンがあり、これからプロジェクターで説明が行われようとしていました。

昨年アメリカのディスカバリーチャンネルが取材に来て20分位にまとめられた動画を拝見しました。その中では、中薬を作ることはもちろん、台湾で自給自足しようとする挑戦が描かれていました。現在は5種類の生薬の栽培に成功していて、これからは自給に向けてやっていくとのことでした。

その後、担当者から会社の説明を受けました。一番強調されていたのは有効性、安全性、均一性を保つようにしているとのこと。最近では安全性を第一に掲げる傾向が有りますが、まずは効かない薬ではいけないとのこと、昔からの古典や本草学書を紐解き、起源植物のキチンとした選定や有効成分の含有などをチェックしているそうです。安全性については、日本や中国の基準のみならず、ドイツやアメリカなどの各国の基準はもちろんのこと、より厳しい自社基準を遵守しているとのことでした。

## 実際に工場見学へ

工場見学では、湿度の高い台湾でエキス剤を作る工夫が随所に見られていました。一番作られる方剤は加味逍遙散で2番目は六味丸だそうです。加味逍遙散は1ロット1.6トン作られるそうです。

煎じ液は、窯の中からパイプは通ってパウダーにされて、それがボトリングまで清潔に安全にパイプの中を通っています。大変長いパイプですが、一品目作ると、当たり前ですが、パイプを全て洗うそうです。これもまた大変な作業だと思われました。



## お昼休憩

台中には客家という独特の文化をもった人たちがいて、そこでの食べられている料理はとても美味しいとのこと。今回はその独特な料理をご馳走になりました。頼む料理にもよりますが、味付けはあっさりしたものが多く、中国料理＝脂っこいと思っている人にはカルチャーショックかもしれません。総勢 11 人で囲んだ円卓にこれでもかと沢山の料理が並んだのは圧巻でした(^-^);



## 新幹線で台北本社へ



台湾新幹線で台北に帰り、次は順天堂本社で学術的な研究について説明をしていただきました。本社は台北の都市部にあり、大きなビルのフロアーに会議室や研究室もあります。ここでも一貫して有効性、安全性、均一性を保つ為にどういうことに取り組んでいるのかと、言うことを科学的観点からお話しいただきました。成分の分析にはやはりフィンガープリントを用いて解析して

いるわけですが、我々は臨床で様々な疑問を持ちながら中医学を実践しているわけです。

特に中医学では当たり前と思った事も、科学的に解析をすると新しいことが発見されたりするのではないかと、思ったりしませんか。今回はそんな些細なことも質問させていただきました。

## 化学分析と煎じと混和

大前提として、品質の鑑定として指標となる化学成分と、薬効を示す成分は必ずしも一致していない（解明されていない）ということがあります。

最近中国では単味の生薬エキス剤を組み合わせて方剤を作る、という方法が流行っているそうです。本来は、人参、乾姜、白朮、甘草の生薬を鍋に入れて煮詰めることによって煎じ薬を作るわけですが（便宜的に煎じエキス剤と呼ぶことにします）、人参から作った単味エキスと、乾姜・白朮・甘草それぞれから作られた単味エキス剤を合わせて「人参湯」として内服する、といった塩梅です（便宜的に混合エキス剤と呼ぶことにします）。これは非常に新しいやり方で、しかもコンピュータシステムと組み合わせて、電子カルテに打ち込んだ情報を元に単味エキスの種類と分量の組み合わせで混合エキス剤の「人参湯」を作れるようになっているとのことです。薬の効果は煎じ薬や煎じエキス剤と遜色ないようですが、それでは「煎じる（熱水抽出法）」ということは意味がないのでしょうか？フィンガープリントで解析をした結果、煎じエキス剤も混合エキス剤も差異はなかったとのことでした。ただし化学成分の解析をということは A というすでにわかっている成分を検出することは容易ですが、未だに発見されていなかったり、新しく化学変化を起こしてできた成分は簡単には解析できません。煎じるということは、新たな成分を創り出したり、邪魔な成分を減少させたりしている可能性もあるのではないかと、その疑問に対してのデータはありません、とのことでした。今後ますますの研究を期待しております。

## 最後に

有意義な質疑応答も終わり、本社を後にしました。学会参加のために毎回台湾を訪れると、学会以外でも沢山の収穫があります。今回も台湾で使われているエキス剤は、非常に高い有効性と安全性を保っている、生薬も中国からの輸入だけではなく台湾で栽培でき始めている、ということがよくわかりました。日本では医療用製剤が固定されてしまい、新たなエキス製剤を作ることはできませんが、台湾には日本の倍程、207種類の煎じエキス剤と数十種類の単味エキス剤があります。その単味エキス剤については日本にも（食品として）輸入され始めるとのことがわかりました。

今回お世話になった順天堂のフタッフの皆さん、色々手配していただいた西野先生、日本中医学会会長の平馬先生に大変お世話になりました。今後とも日本国内だけにとどまらず、東アジア、世界とのつながりを広げていきたいと思えます。